

豊かに考える子どもを育む

教育課程の実現

— 2年次研究 —

1 研究主題設定の意図

「これからの社会を生きる子どもたちに、何を育めばよいのか」

学校教育に携わる者は、絶えずこのことを考えて教育活動に取り組む。そして、確かに育むことができていたかを評価し、課題を探り、教育活動を改善・充実させていく。私たちは、先人が行ってきたこの不断の営みの理念を受け継いでいく。

また、これからの社会は、情報化やグローバル化の進展等により、急速に変化し予測困難な時代を迎えると言われている。このような社会の状況に対して、新学習指導要領では改訂の基本的な考え方が示された。これからの社会を見据え、どのような資質・能力をどのように育成するのか、そして、確実に育成するための教育活動の質をどのように向上させるのかが求められている。

私たちは、これらの理念や社会の状況等を踏まえ、これからの社会で様々な困難や課題に直面するであろう子どもたちが、自ら幸福な人生やよりよい社会を切り拓くことができるようにしたいと強く願う。そこで、当校の教育活動の特色や子どもの姿を基に、教育目標「学びを生かす子ども」を具体化した姿として、目指す子どもを「豊かに考える子ども」とした。

「豊かに考える子ども」

目的や課題に応じて様々な資質・能力を発揮し、課題解決する子ども

そして、この「豊かに考える子ども」を、授業をはじめ教育活動全体で育もうと考え、研究主題を「豊かに考える子どもを育む教育課程の実現」と設定したのである。

2 教育課程の基本方針

(1) 育成する資質・能力

これからの学校は、教育課程において育成する資質・能力を明確に設定する必要がある。

当校では、前年度研究までで、これまでの教育活動の特色と子どもの姿、これからの学校教育で求められることを基にして、育成する資質・能力を明確にしてきた。今年度、私たちはこれを整理し、次のように設定している。

教科等の資質・能力である①知識・技能，②思考力・判断力・表現力，③態度は，新学習指導要領で示されている「資質・能力の三つの柱」に準拠している。

ツール活用能力，協働性は，教科等にかかわらず，学びを支える基盤となる資質・能力としている。この二つの資質・能力は，これまで当校が取り組んできた教育活動における子どもの姿を基にしている。

そして，この設定を基に，各教科等や各種教育（保健教育，食に関する教育等）で育成する具体的な資質・能力を「資質・能力一覧表」にまとめてきた（※本冊子，「各教科等の基本方針」等参照）。当校では，これを拠り所として，教育活動を進めている。

育成する資質・能力			
	①知識・技能	②思考力・判断力・表現力	③態度
教科等	実生活や他の課題解決に用いることができる知識や技能	目的や課題を解決するための思考力・判断力・表現力	主体的に課題解決に向かう態度 人や物事にかかわろうとする態度 自らを客観的にとらえる態度
基盤		ツール活用能力 目的や課題に応じ，ツールを適切かつ有効に活用する力	協働性 他者と目的や課題を共有し，互いのよさや多様性を生かして課題解決に向かう態度

(2) 資質・能力の育成

資質・能力を育成するために，当校では，目的や課題に応じて「見方・考え方」を働かせ，資質・能力を発揮させること，そして，発揮した資質・能力の自覚を促すことを教育活動に組み込んできた。

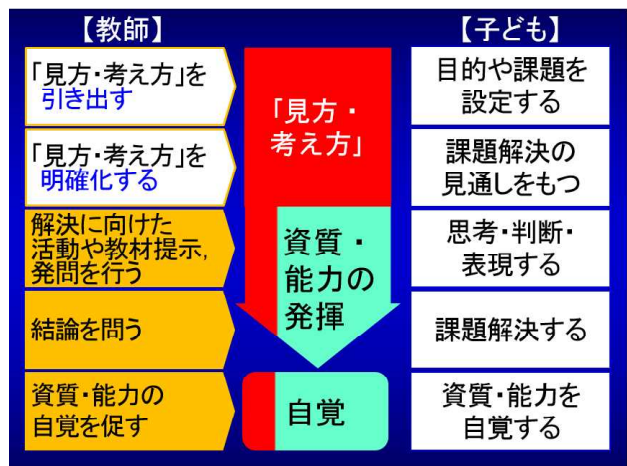
特に，教育活動の中で最も重要な授業については，前年度研究までで右図の「授業の基本構造」を構築した。

この基本構造は，子どもが目的や課題に応じて様々な資質・能力を発揮して課題解決し，発揮した資質・能力を自覚する一連の過程を表している。

また，子どもが資質・能力を発揮することができるようにするために，教師が教科等の「見方・考え方」を引き出し，明確化するように働き掛けることも表している。

このように，資質・能力の発揮，自覚を促す教育活動を進めてきた当校では，資質・能力を他の目的や場面で発揮する子どもの姿が見られるようになってきた。資質・能力の発揮，自覚を，一度だけでなく，繰り返すことが大切であると分かってきたのである。

そこで，前年度研究の成果から，私たちは教育課程の基本方針を次のように設定した。



【教育課程の基本方針】

資質・能力の発揮，自覚を繰り返す教育活動の実施

この基本方針の下，年間を見通して教育活動の実施を進めていくことで，研究主題に掲げた「豊かに考える子どもを育む教育課程の実現」に迫ろうと考えたのである。

3 今年度研究の取組

今年度研究の取組は、前年度研究を引き継ぎ、「豊かに考える子ども」を育む教育課程の実現を目指したカリキュラム・マネジメントである。

その中で、私たちは、教育活動の質の向上を目的とするカリキュラム・マネジメントにおける三つの側面（教科等横断的な視点での組立て・実施状況の評価と改善・人的又は物的な体制の確保）を踏まえ、次の三つに取り組むことが重要だと考えた。

- (1) 年間指導計画の更新
- (2) 発揮, 自覚を基に評価・改善
- (3) 一か月サイクルの組織運用

これら三つに取り組むことで、年間を通して資質・能力の発揮, 自覚を繰り返す教育活動の在り方, 方法を明らかにしようとしたのである。

(1) 年間指導計画の更新

資質・能力の発揮, 自覚を繰り返す教育活動を実施していくためには、どの教育活動でどの資質・能力の発揮, 自覚を促すのかを、年間を見通して考える必要がある。

そこで、「資質・能力一覧表」と前年度までの年間指導計画とを重ねて検討し、更新することにした。資質・能力の発揮, 自覚を繰り返すように、意図的・計画的に年間の教育活動を組み立てようと考えたのである。その際に大切にすることが、教科等横断的な視点で資質・能力の関連性を考えることである。

基盤となる資質・能力であるツール活用能力は、各教科等の学習内容とツールを使う目的（集める・広げる・分ける・まとめる）とで結び付け、下図のように、「年間指導計画」の各教科等の単元や題材などに位置付けた。

例えば、2年国語「なかまになることば」では、言葉を仲間に分ける学習を行う。この学習内容に適したツール（例：Xチャート）の活用を想定し、ツールを使う目的（分ける）を位置付ける。2年生活「あきさがしたんけんたい」では、秋を感じる物を集める学習を行う。この学習内容に適したツール（例：タブレット端末写真機能）の活用を想定し、使う目的（集める）を位置付ける。

「年間指導計画」		ツール活用能力	
学習内容とツールを使う目的とで結び付け			
学習内容	ツール	学習内容	ツール
たからものをしょうかいしよう	まとめる	絵を見てお話をつくらう	分ける
ありがとうをつたえよう	集める	名前を見てちょうだい	まとめる
きつねのおきやくさま	分ける	なかまになることば	分ける
声に出してみよう		あそびのやくそく話し合おう	分ける
しよしゃ		しよしゃ	
水のかさ	集める	三角形と四角形	分ける
三角形と四角形	分ける	かけ算(1)	
あきさがしたんけんたい	集める		
どうぶつとなかよし		どうぶつとなかよし	
つくらう!あそVIVA	分ける	つくらう!あそVIVA	分ける

この例のように、単元や題材などの学習内容とツールを使う目的とを結び付けることで、教科等にかかわらず、他の目的や場面でもツール活用能力の発揮, 自覚を繰り返す教育活動を実施することができるのである。

また、基盤となる資質・能力である協働性は、各教科等の授業はもとより、活動内容と発揮する場面とを結び付け、次頁の右上図のように、「年間指導計画」の朝の活動時間「クラスカルチャータイム（CCT）」や学校行事等に位置付けた。

例えば、4月「1年生を迎える会」では、新1年生への歓迎の出し物を発表する活動内容がある。そこでは、学年で協力して練習する場面を想定できる。5月の運動会では、全校ダンスを披露する活動内容がある。そこでは、披露に向け、教え合って練習する場面を想定できる。6月の登山は、異学年班で山頂を目指す活動内容である。そこでは、学年を超えて、互いに励まし合う場面を想定できる。

「年間指導計画」		協働性	
活動内容と発揮する場面とで結び付け			
	クラスカルチャertime(OOT)		
学校行事等	始業式	附属大運動会	1~4年生登山
	入学式	健康診断	音楽鑑賞会
	1年生を迎える会		避難訓練
	避難訓練		健康診断
	健康診断		

この例のように、活動内容と発揮する場面とを結び付けることで、他の目的や場面でも協働性の発揮、自覚を繰り返す教育活動を実施することができるのである。

さらに、教科等の資質・能力も、教科等横断的な視点でその関連性を考え、教科等横断的な学習単元を開発して年間指導計画に位置付けている。

例えば、4年の国語科では、育成する②思考力・判断力・表現力の一つに「調べて分かったことと自分の考えとを整理して書き表す力」がある。

また、4年の社会科では、育成する②思考力・判断力・表現力の一つに、「資料等を基に、根拠や理由を明確にして、自分の考えを論理的に説明する力」がある。この二つの資質・能力には、事実と考えとを分類して考えるという関連性（下線部）がある。

「年間指導計画」		①知識・技能	②思考力・判断力・表現力	③態度
教科等横断的な学習単元				
消防署のヒミツを探し隊！（16）				
国：みんなで新聞をつくろう（0）				
社：火事を防ぎ、地震にそなえる（10）				
学習内容	ツール	時数	事実と考えとを分類して考える	
〈4〉みんなで新聞を作ろう				
国語辞典、漢字辞典の使い方を調べる				
〈5〉漢字の組み立てと意味を考えよう				
〈6〉インタビューをして×毛を取ろう				
〈3〉俳句に親しもう				
書写	思・判・表		4	
〈4〉火事を防ぎ、地震にそなえる	まとめ		10	

この例のように、資質・能力の関連性を考えて教科等横断的な学習単元を開発し、上図のように「年間指導計画」に位置付け、実施する。この単元を通して、子どもは見学や資料等から得た情報を基に、国語科、社会科の資質・能力を発揮して、事実と考えとを分類して新聞にまとめ、防災に対する自分の考えを論理的に説明する。

このような教科等横断的な学習単元を開発、実施することで、他の目的や場面でも各教科等の資質・能力の発揮、自覚を繰り返す教育活動を実施することができるのである。

教科等横断的な学習単元の開発の視点として、今年度、次の二つを設定している。

〈教科等横断的な学習単元 開発の視点〉	
○ 資質・能力の関連性	○ 各種教育（現代的な諸課題に関する教育）

現代的な諸課題に関する教育も開発の視点としている。例えば、環境に関する教育である。6年理科「生物のくらしと環境」で、環境問題（例：便利なプラスチック製品が海洋汚染につながっている）を扱うとする。この問題を扱うことで、理科の「生物と環境とのかかわりについて考える力」や、家庭科の「環境に配慮した生活について物の使い方を考える力」等、各教科等の資質・能力の発揮、自覚を促す単元の開発、実施ができる。

(2) 発揮, 自覚を基に評価・改善

資質・能力の発揮, 自覚を繰り返す教育活動を実施し, 「豊かに考える子ども」を育む教育課程の実現を目指すためには, ただ教育活動を繰り返しているだけでは実現に近付けない。実施した教育活動を評価し, 改善を考え, その後の教育活動を実施する必要がある。

そこで, 資質・能力の発揮, 自覚を見取る評価計画を作成することにした。資質・能力の発揮, 自覚を見取り, 実施した教育活動の成果と課題を洗い出して教育活動を改善していくことで, 他の目的や場面でも発揮できる資質・能力の確かな育成を考えたのである。その際に大切にすることが, 実施する教育活動において資質・能力の発揮, 自覚をしている子どもの姿を具体的に描くことである。

それぞれの教育活動で育成する資質・能力は, 「資質・能力一覧表」を活用して設定する。この設定を基に, 教育活動の内容や時間のまとまりを見通して, どの場面で, どの資質・能力の発揮, 自覚が, どのような子どもの姿として表れるのかを, 単元指導計画等に明記する。単元指導計画等を構想する段階で, 「この資質・能力を発揮している子どもは, このように書く(話す, 動く, つくる等)」, 「発揮したこの資質・能力を自覚した子どもは, このように書く(話す等)」などと, 資質・能力の発揮, 自覚を, 子どもの具体的な姿で想定するのである。

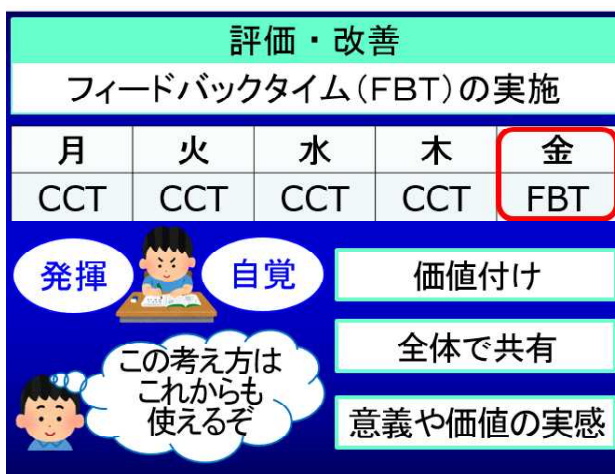
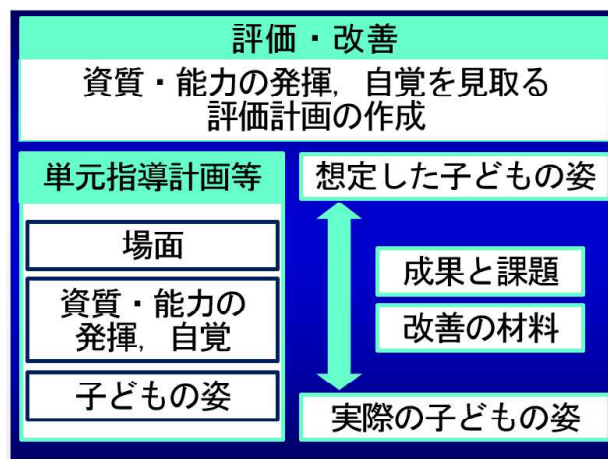
このように作成した評価計画を基にして, 教育活動実施後, 想定した子どもの具体的な姿と実際の子どもの姿とを照合する。照合することで, 子どもの姿を基にして, 資質・能力の発揮, 自覚を見取ることができる。

そして, 資質・能力の発揮, 自覚を基に実施した教育活動を評価し, その成果と課題を考える。ここで得る成果と課題が, その後の教育活動を改善していく材料となる。

このように, 資質・能力の発揮, 自覚を見取り, 実施した教育活動を評価して, その後の教育活動の改善を重ねていくことで, 他の目的や場面でも発揮できる資質・能力の確かな育成をしていくことができるのである。

また, 今年度新たに, 資質・能力の発揮, 自覚をした事実を子どもに返す「フィードバックタイム」という時間を設定し, 実施している。毎週金曜日に, 学級担任がノート記述や写真等, 資質・能力の発揮, 自覚をしたことが分かる物を提示して, 発揮・自覚を価値付け, 学級全体で共有する。

この時間は, 学んだことの意義や価値を子どもが実感できるようにしようと取り入れた時間である。



(3) 一か月サイクルの組織運用

「豊かに考える子ども」を育む教育課程の実現を目指すためには、全校体制で組織的・計画的に取組を推進していく必要がある。

そこで、当校では、研究の全体統括を担う研究部員がそれぞれにリーダーとなる、次の四つのプロジェクト部を組織している。役割を明確にして組織することで、各部がそれぞれに中心となり、全校体制での取組を推進していくことができると考えたのである。

○ スタディ部

全教諭が3, 4人に分かれて構成する。主に教科等の資質・能力の育成を目指して、単元構想や授業の検討、授業後の協議を担う。

○ ツール活用能力育成部

低・中・高学年部の教諭で構成する。ツール活用能力の育成を目指して、育成する取組の全体への提案、各学年部の実施状況の集約、取組の改善検討等を担う。

○ 協働性育成部

低・中・高学年部の教諭で構成する。協働性の育成を目指して、育成する取組の全体への提案、各学年部の実施状況の集約、取組の改善検討等を担う。

○ カリキュラム・マネジメント推進部

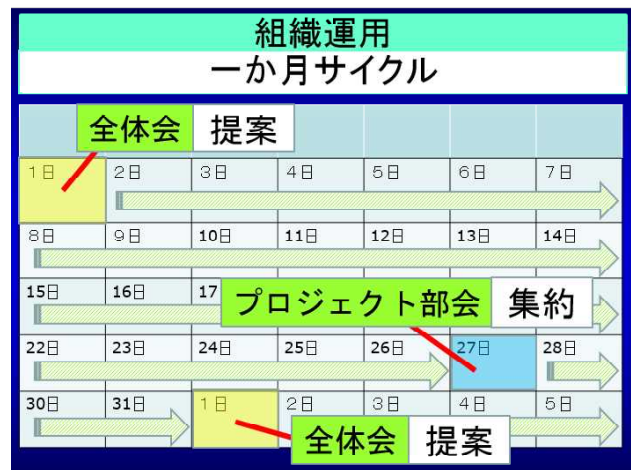
主幹教諭、養護教諭、栄養教諭を含めた教諭で構成する。資質・能力を育成する取組の円滑な推進を目指して、年間指導計画等の枠組提案、修正の指示、他の三つの部や外部との連絡、調整を担う。

また、このように組織した各部が連携し、計画的、そして、効率的に取組を推進していくために、当校では、基本的に月初めの研究の全体会、月終わりのプロジェクト部会を設定し、下図のように、一か月サイクルでの組織運用に取り組んでいる。

月初めの全体会では、各部のリーダーである研究部員が中心となり、各部が資質・能力を育成する取組の提案をし、全職員で共有する。

そして、共有した取組を受けて、各教諭が教育活動を実施し、資質・能力の発揮、自覚をした子どもの姿の集積をする。

月終わりのプロジェクト部会では、カリキュラム・マネジメント部が中心となり、集積した子どもの姿を基に、各部の取組に対する成果と課題を集約し、改善案の検討をする。



このような一か月サイクルでの組織運用に取り組むことで、今月の子どもの姿をすぐに翌月の取組に反映させ、教育活動の改善をしていくことができる。学期末や学年末でまとめて改善案の検討をすると、数か月間に及ぶ子どもの姿の膨大な集積から成果と課題を洗い出すことになり、余計に時間が掛かる。また、検討した改善案をその後の取組に反映させ、教育活動の改善をする機会も限られる。一か月サイクルで改善案を検討することで、効率的に取組を推進し、教育活動を改善していくことができるのである。

4 研究の成果と今後の課題

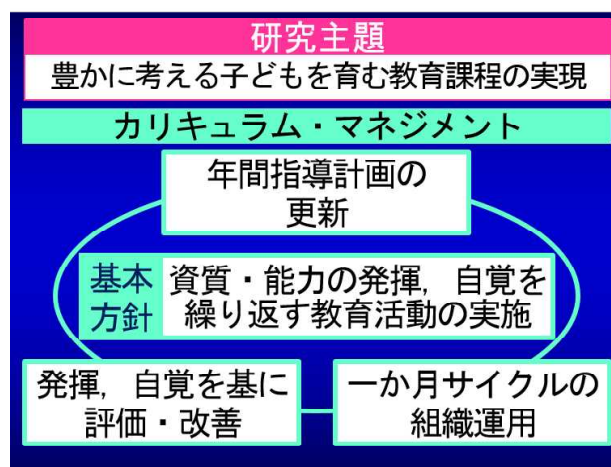
今年度、子どもへの意識調査を毎学期末に実施している。その結果、特に次の調査項目において、肯定的回答の割合が高くなっている。

- 授業に主体的に取り組んでいる。
【1学期：94.4%，2学期：95.7%】
- お互いのよさや考えを生かして、学習や活動に取り組んでいる。
【1学期：94.6%，2学期：96.9%】
- 目的に合うツールを使って、学習や活動に取り組んでいる。
【1学期：94.6%，2学期：98.1%】

右図に示すように、資質・能力の発揮、自覚を繰り返す教育活動の実施を基本方針として、カリキュラム・マネジメントに取り組んできた成果の一つである。

授業研究の成果等を、後頁に示す。
今後の課題を、次に示す。

- 学習評価方法の確立
- 各教科等の指導計画修正



[主な引用・参考文献]

- ・中央教育審議会（2016・12），『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』
- ・文部科学省（2017・3），『小学校学習指導要領』
- ・同（2017・6），『小学校学習指導要領解説・総則編』
- ・同（2017・7），「学習評価に関する資料（教育課程部会・資料5－2）」
- ・国立教育政策研究所（2011・11），『評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料』
- ・当校研究紀要 第57集（2000・2），『「実践的な態度」を育てる教育課程の編成』
- ・同 第67集（2010・2），『子どもが学ぶことに価値を見いだす教育課程の編成－3年次研究－』
- ・同 第75集（2018・2），『豊かに考える子どもを育む教育課程の実現』

文責 研究主任 里村 穰